

Target is 齋藤 みゆき (34歳)

妻を愛するが故、旦那が企てた計画。

愛してるよ、
イヤです…旦那以外のモノなんて、口にしたくない…
競水人妻
寝取られ
ハンティング

「奥さん、測定の結果、
ケツがデカ過ぎるから
罰ゲームだな。」

私は競泳水着フェチであり、匂いフェチでもある。

妻のみゆきはとても優しく、私のそのフェチを受け入れてくれている。少し恥ずかしそうに、少し嫌がる素振りも見せながら、それでも応えてくれる。私はそんな妻がとても愛おしく思える。

休みの日には家で競泳水着を着てもらい、その上に服を着て、外出する。そして、人気がない撮影場所を一緒に探し歩く。

そうすることで、ややぼつちやいな妻は汗をかき、水着に汗を染み込ませるのだ。水着も彼女の体には小さいMサイズを無理矢理に着せる。

「キツいからLにして」とお願いされるが、私はMを買う。

キツイ競泳水着を着るだけで、アソコに染みを作っているのを知っているから。興奮して汗ばみ、アソコを濡らし、イヤらしい匂いをプンプンさせるみゆき。そんな妻が、愛おしくてたまらない。

人間とは欲深い生き物で、これだけ妻が私の趣味を受け入れてくれているにも関わらず、善からぬことを考えてしまう。

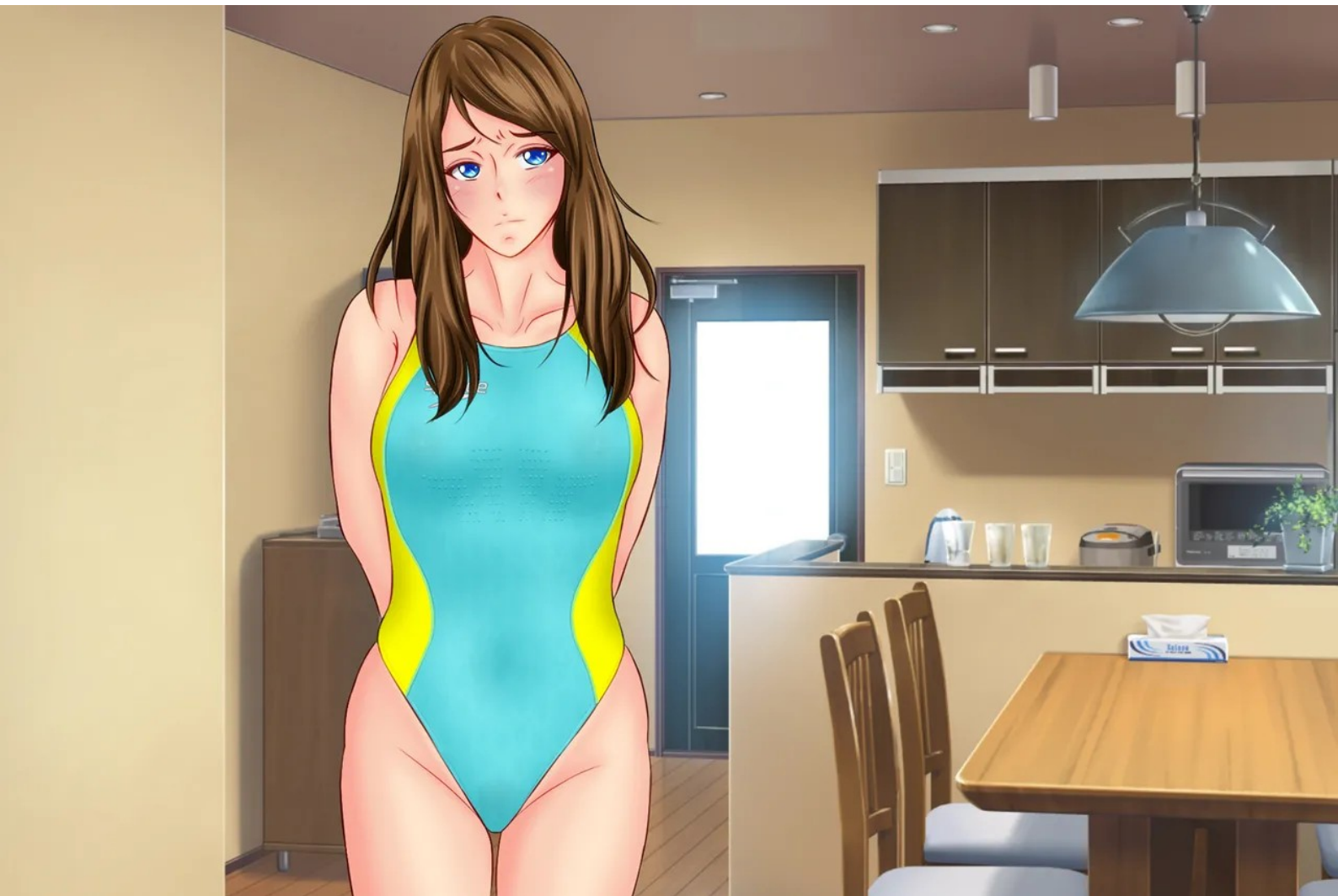
撮影をしていると、つい思ってしまうのだ。

「みゆきが他人に犯されている所が見たい」と。

いくら妻がお人好しでも、さすがにこれだけは首を縦に振らないだろう。女には理解できない感情というものが男にはあり、この『寝取られ願望』はその中の一つだ。だから、口が裂けても妻には言えない。

でも、だからこそこの欲望は、どんどん大きくなっていく。

競水人妻寝取られハンティング



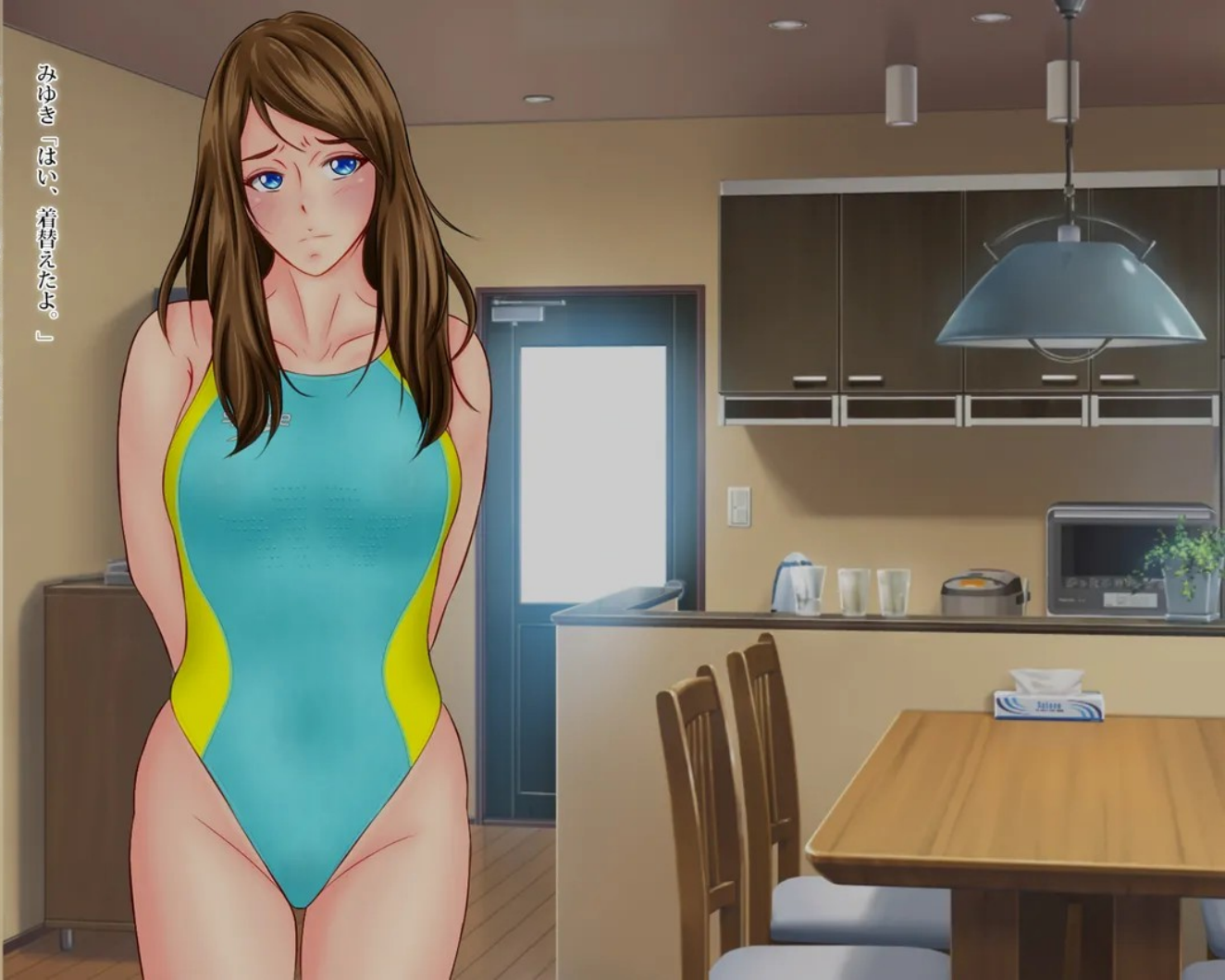
みゆき「はい、着替えたよ。」

私「やっぱりよく似合うよ、その水着。」

みゆき「キツイから嫌だって言ってるのに…カットも高いし。」

私「その水着を着るといつもより濡れてるのは誰だ？」

みゆき「も、もう…知らない！」



妻はDMだと思う。
だから錯覚してしまったんだ。
寝取られ願望を告げても、みゆきなら理解してくれるんじゃないかと。





みゆき「今日はどうするの？」

私「今日は電車で行こうか。ちょっと気になっている場所があるんだよ。」

みゆき「電車って…結構恥ずかしいんだからね。」

私「ごめんごめん。でも、車では行けない所なんだ。」

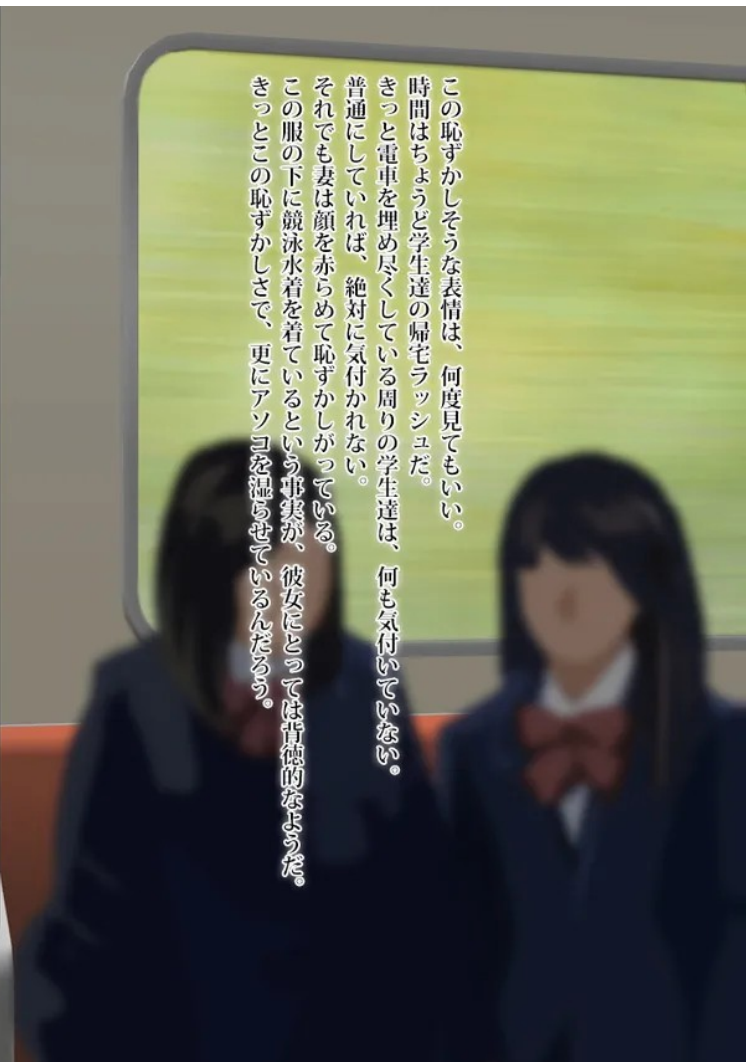
みゆき「へー、今日はもう場所は決まってるんだ？」

私「ああ、何年前前に会社の慰安旅行で行った場所なんだけどね。」

みゆき「ふーん、そうなんだ。」

言えないけど、事後報告なら許してくれるんじゃないかと。





この恥ずかしそうな表情は、何度見てもいい。
時間はちょうど学生達の帰宅ラッシュだ。
きつと電車を埋め尽くしている周りの学生達は、何も気付いていない。
普通にしていれば、絶対に気付かれない。
それでも妻は顔を赤らめて恥ずかしがっている。
この服の下に競泳水着を着ているという事実が、彼女にとっては背徳的なようだ。
きつとこの恥ずかしさで、更にアソコを湿らせているんだろう。





今、妻がこんな水着を着ているなんて、知っているのは私だけだ。
時折私をさがるような目で見てくるのは、私に支配されているという感覚からだろう。
物事を被虐的に考えてしまうのは、Mの特性だ。

だからきつと、他人に犯されても濡らすんじゃないかと。

都合のいいように考え妄想を膨らませる私は、既にこの欲望を抑えることができなくなっていた。だから私は妻に内緒である計画を立てた。

それは、偶然を装って妻が犯されるように仕向ける作戦。

インターネットで「寝取り趣味」がある連中を探し、コンタクトを取った。

今向かっている場所は、すでに彼等と下見が済んでいる。慰安旅行で行ったというのは、実は真っ赤な嘘だった。

みゆきはこの事実を知った時、私のことをどう思うのだろうか。

もしかしたら、離婚になるかもしれない。

でも、一つだけわかってほしいのは、この計画はみゆきを愛しているからこそだということ。私にとってこれは、愛情表現なのだ。





みゆき「凄く空気がキレイで、いい所だね。でも…本当に人が来ないの？」

私「ああ、ここは大丈夫。慰安旅行の時も、人が寄り付かない公園って言われてたから。」

それは連中から聞いたことだった。

この公園は裏山と繋がっており、その山の中には貸別荘がある。強姦事件等が多く、最近ではほとんど人が寄り付かなくなったそうだ。

私「そろそろ撮影を始めようか、みゆき。」

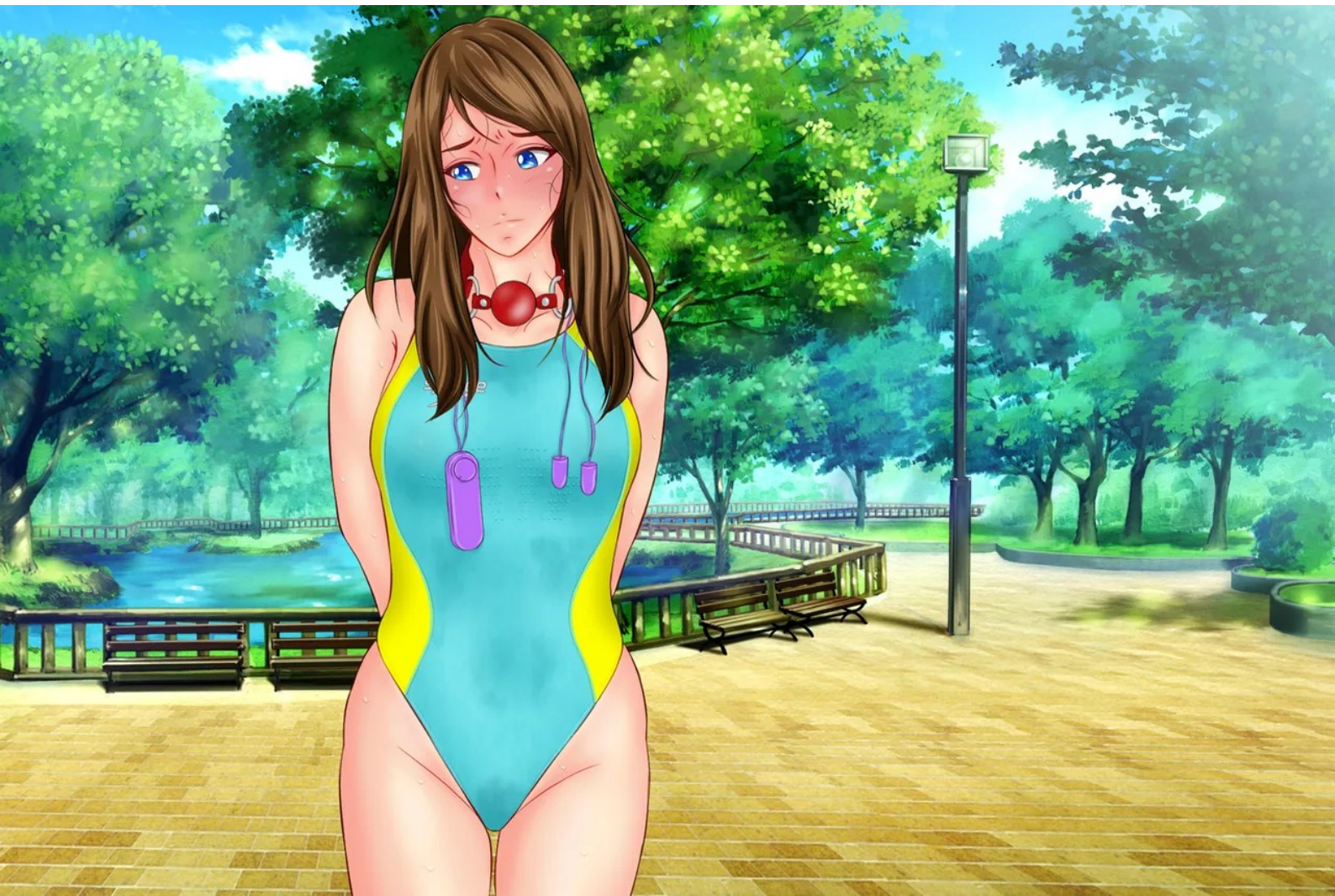
みゆき「…うん。」

妻は周りを気にしながら、服を脱ぎ始めた。

私「今日のアクセサリーはこれね。」

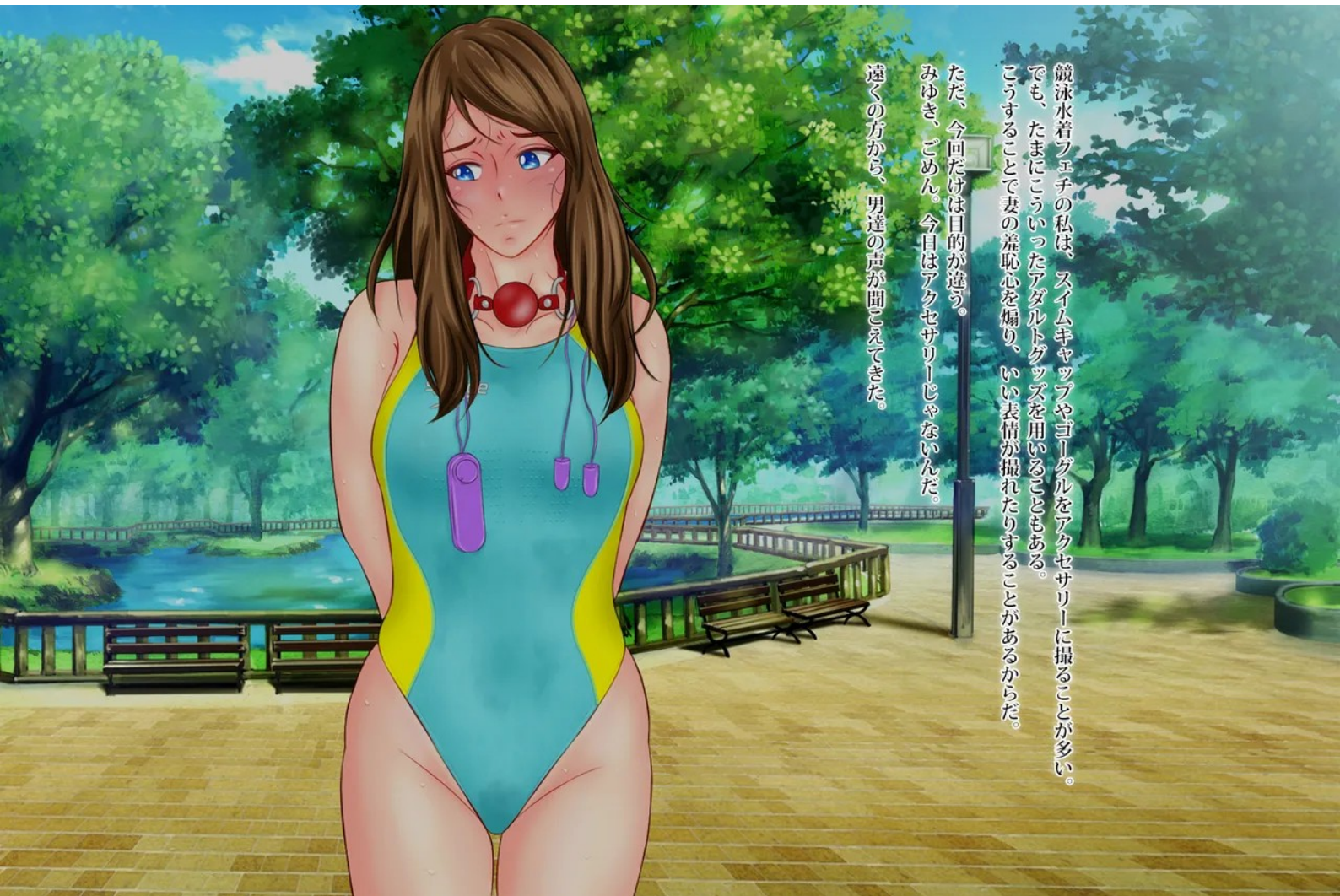
そう言っただけで私は妻にボールギャグとローターを手渡した。

ここまでは普段と変わらないから、妻も疑うことなく応じてくれる。



競泳水着フエチの私は、スイムキャップやゴーグルをアクセサリーに撮ることが多い。でも、たまにこういったアダルトグッズを用いることもある。こうすることで妻の羞恥心を煽り、いい表情が撮れたりすることがあるからだ。

ただ、今回だけは目的が違う。みゆき、ごめん。今日はアクセサリーじゃないんだ。遠くの方から、男達の声が聞こえてきた。



みゆき「えっ！？誰か来たんじゃないっ!？」

私「嘘だろ…みゆき、とりあえず裏山に逃げる！俺は機材片付けてからすぐ行くから！」

みゆき「えっ、機材なんか後でいいじゃん！」

私「よくないよ！見られたらマズいのはみゆきなんだから、早く逃げる！」

みゆき「わ、わかったわよ…早く来てね！」

みゆきはパツンパツンの競泳水着を着たまま、裏山の方へ走っていった。

いよいよだ。

私は彼等に約束通り拘束用のボンテージテープを手渡した。

私「頼んだよ。」

男達「ああ、こっちも楽しませてもらうよ。」

この時点で、私の股間は既にギンギンに勃起していた。





彼等は逃げる妻を追う。
私は少し距離を置いて、後ろから隠れるように彼等を追った。
手にはカメラではなく、ビデオカメラを持って。

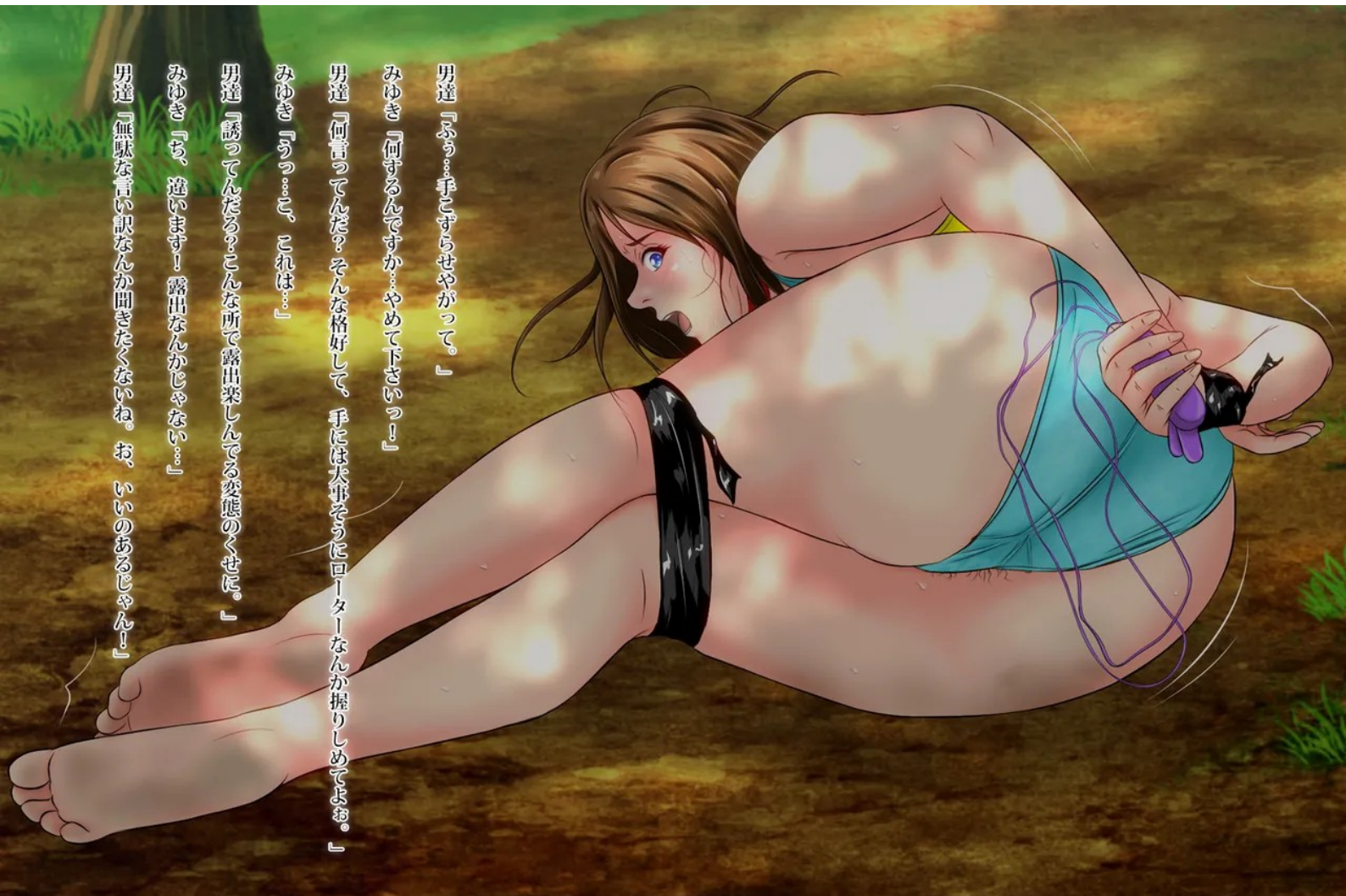
男達「奥さん、逃げてても無駄だよ！」

見知らぬ男達に追われ、必死に逃げる妻。
手にはローターを握りしめ、首にはまるで首輪のように取り付けられたボールギャグ。
キツめの競泳水着は妻のデカイケツに容赦なく食い込んでいた。

みゆき、たまらないよ…。

みゆき「やめて、来ないで……いやあああつ……！」





男達「ふう…手ですらせやがって。」

みゆき「何するんですか…やめて下さいっ！」

男達「何言ってるんだ？そんな格好して、手には大事そうにローターなんか握りしめてよお。」

みゆき「うひ…うひ…これは…」

男達「誘ってたんだろ？こんな所で露出してる変態のくせに。」

みゆき「ち、違います！露出なんかじゃない…」

男達「無駄な言い訳なんか聞きたくないね。お、いいのあるじゃん！」

彼等はボールギャグに気付き、その大きな玉を妻の小さな口に強引にはめ込んだ。





みゆき「んぐらー……んぐらー……」

男達「しばらく静かにしてろよ奥さん。ヒッヒッヒッ……」

みゆき「んぐらー……んぐらー……」

くぐもった妻の声は、とても興奮する。

妻は今、どんな気持ちなのだろう。

回を寝がれた今、心の中で私の名前を叫んでいるのだろうか。
それとも、この状況に興奮しているのだろうか。

言うまでもなく、私は興奮している。

男達「おっと……そっだ。目隠しを忘れた。」





私が彼等に渡したボンテージテープは粘着性はなく、ラップのようなイメージだ。静電気によってテープ同士がくっつく為、肌には優しい作りになっている。これも妻への愛惜だ。

そして、これで手足を縛り、目隠しをするように指示をしたのも私だ。そうすれば、目隠しをしている間は近くにいられるから。間近で妻の犯されている姿を見たかった。愛しているから。

男達「奥さん、水着が小さ過ぎてマン毛がはみ出してるぜ？」

みゆき「ンツ……んちゅ……」

妻はどっすることもできない。
ただ恥ずかしそうに、鼻から切なげな声を漏らすだけだった。

男達 「折角だから、その大事そうに握っているローターで遊ぼうか？ 奥さん。」

みゆき 「んん…っ!？」

彼等は妻の手からローターを取り上げ、競泳水着の股布を捲ると、二股に別れている片方をクリへ、もう片方をマ●コに当て、水着を戻した。

男達 「絶対に止めたり弱くしたりするなよ。」

そう耳元で囁くと、妻の手にコントローラーを握らせる。





みゆき「んふっ……んふっ……んふっ……んふっ……」

妻が悶え出した。

手足を縛られて身動きが取れず、視界と口を塞がれたまま、だらしなく涎を垂らして感じている。やっぱりみゆきは、思った通りの変態下Mだ。

男達「おいおい奥さん、感じてんのかい？」

みゆき「んんう……んんう……んんう……んんう……んんう……」

必死に頭を振る妻。

そう、私は妻のこんな姿が見たかったんだ。必死に抵抗しながら、嫌がりながら、それでも感じてしまう妻の姿を。

妻は思っているはずだ。

「感じてなんかいない、やめて、もう許して。」
「どうして？気持ちよくなかなのに……どうして濡れちゃうの……」

そんな被虐的なイメージで頭がいっぱいになり、イキ果てるのだ。

みゆき「んっ…んふうううううっ!!!!!!」





男達「あっはははは、すげーなこの奥さん。潮噴いてイッちゃったよ。」
みゆき「んっ……んふう……んっ……んふう……」
男達「はてど、じゃあ移動しますか。」

私は彼等に対し、静かに頷く。
片方の男が妻を抱え上げ、肩に乗せて運んでいく。

男達「あんまり暴れるとこのまま山の下に突き落とすぜ？」

みゆき「ンッ……んっ……」

そしてそのまま、今は使われていない貸別荘へと向かった。

……
……

予め下見は済ませてある。

私は計画通り、うまく隠れることができる所に身を潜めた。

目隠しばかりでは面白くないからだ。

男達「念の為言っておくけど、むやみに外に飛び出さない方が身の為だぜ。」

目隠しをされた状態で担がれてここまで来た妻は、帰り道などわかるはずもない。
彼等はそう釘を刺し、妻の拘束を解き、目隠しも外した。



男達「奥さん、髪の毛縛ってくれよ。」

妻はうつすらと目に涙を浮かべたまま、逃れようのない状況下で彼等の言いなりになっていく。しっとり汗ばんだ体で腋を晒し、髪を束ねて結う妻の姿は、今まで見てきた中で一番色っぽいと感じた。

男達はそんな私の気持ちを知らずか、妻の腋に鼻を近づけていく。





男達「んはあああ…人妻の腋の匂い、たまんねえわ。」

みゆき「や、やめて下さいっ！」

妻は以前、腋を見られるのはとても恥ずかしいと言っていた。
旦那の私ですら恥ずかしいのに、今は見ず知らずの男に囲まれて見られ、更な匂いまで嗅がれてる。
妻の顔は見る見る赤くなっていった。

男達「ところで奥さんはどうして競泳水着なんか着てるんだい？」

みゆき「旦那の…趣味です。」

男達「奥さんの体型には随分と不釣り合いだな、はっはっはっ！」

みゆき「うう…へっ…恥ずかしいっ！」

男達「奥さん、自己紹介してくれよ。名前、年齢、スリーサイズくらいは言えるだろ。」

みゆき「そ、そんな…イヤです、言えません。」

男達「だから言えよ。言わなるともっと酷い目に遭うぜ。」

みゆき「……齋藤みゆき…三十四歳…スリーサイズは…許して下さいっ！」

妻は自分のぼっちゃり体型を気にしている。

そんな恥ずかしい質問をされて困っているみゆき…とても可愛だよ。



男達「わかったよ。じゃあ、そこにうつ伏せで横になって。」

みゆき「……はい。」

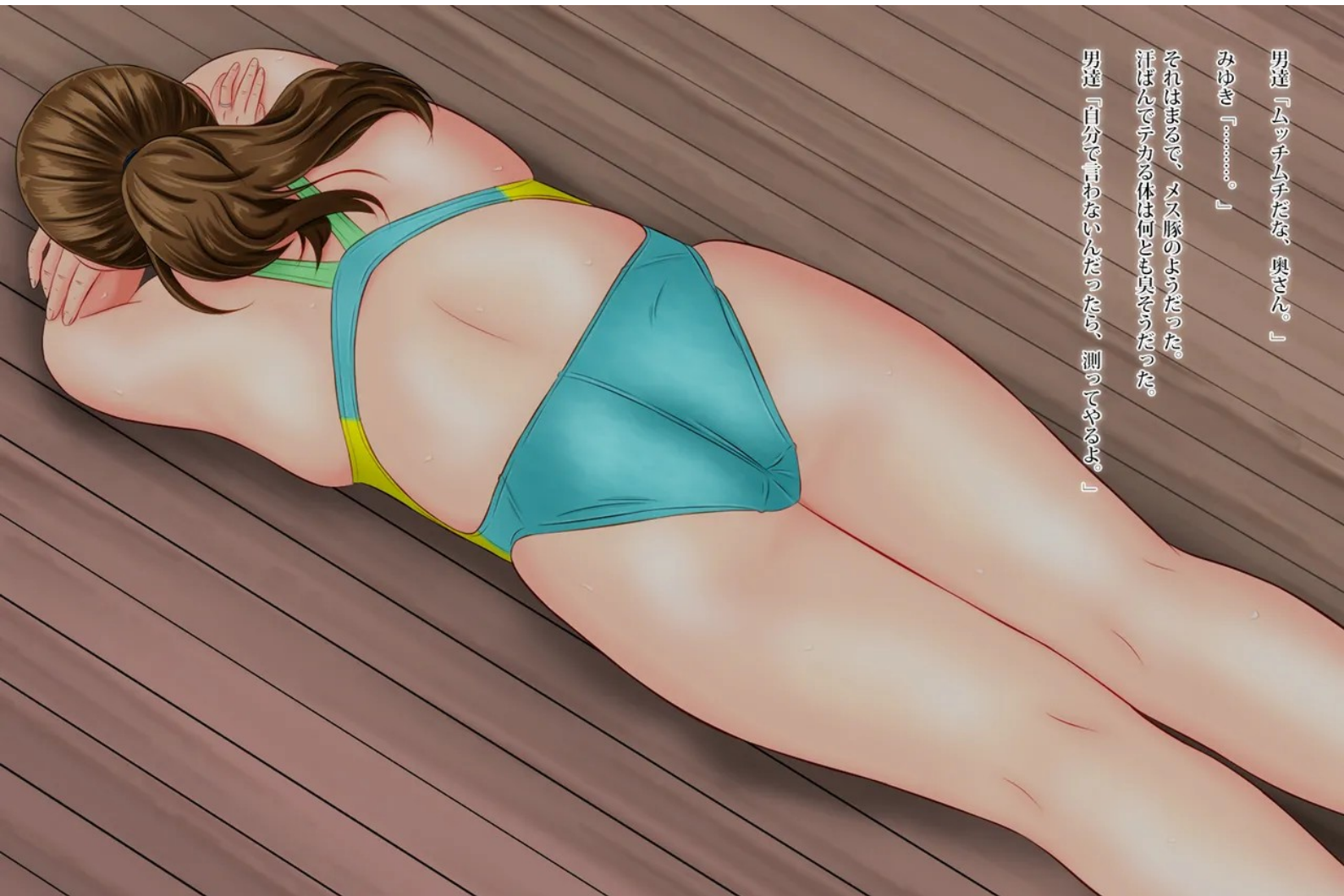


男達「ムッチムチだな、奥さん。」

みゆき「……………」

それはまるで、メス豚のようだった。
汗ばんでテカる体は何とも臭そだった。

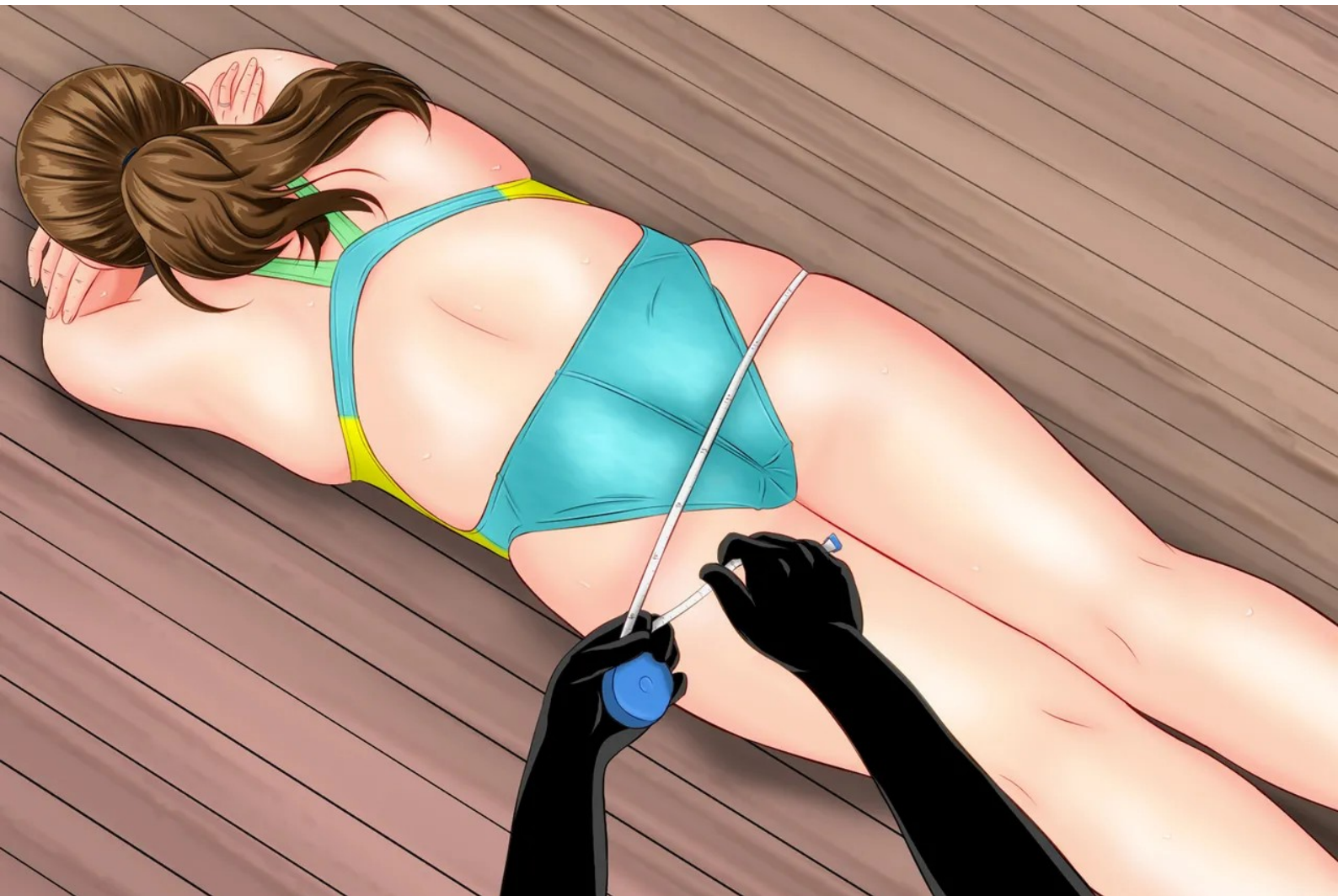
男達「自分で言わないんだったり、測ってやるよ。」



みゆき「ちよ、ちよっと、何してるんですか！？やめて下さい！」

男達「うるせー！じっとしてろー！」

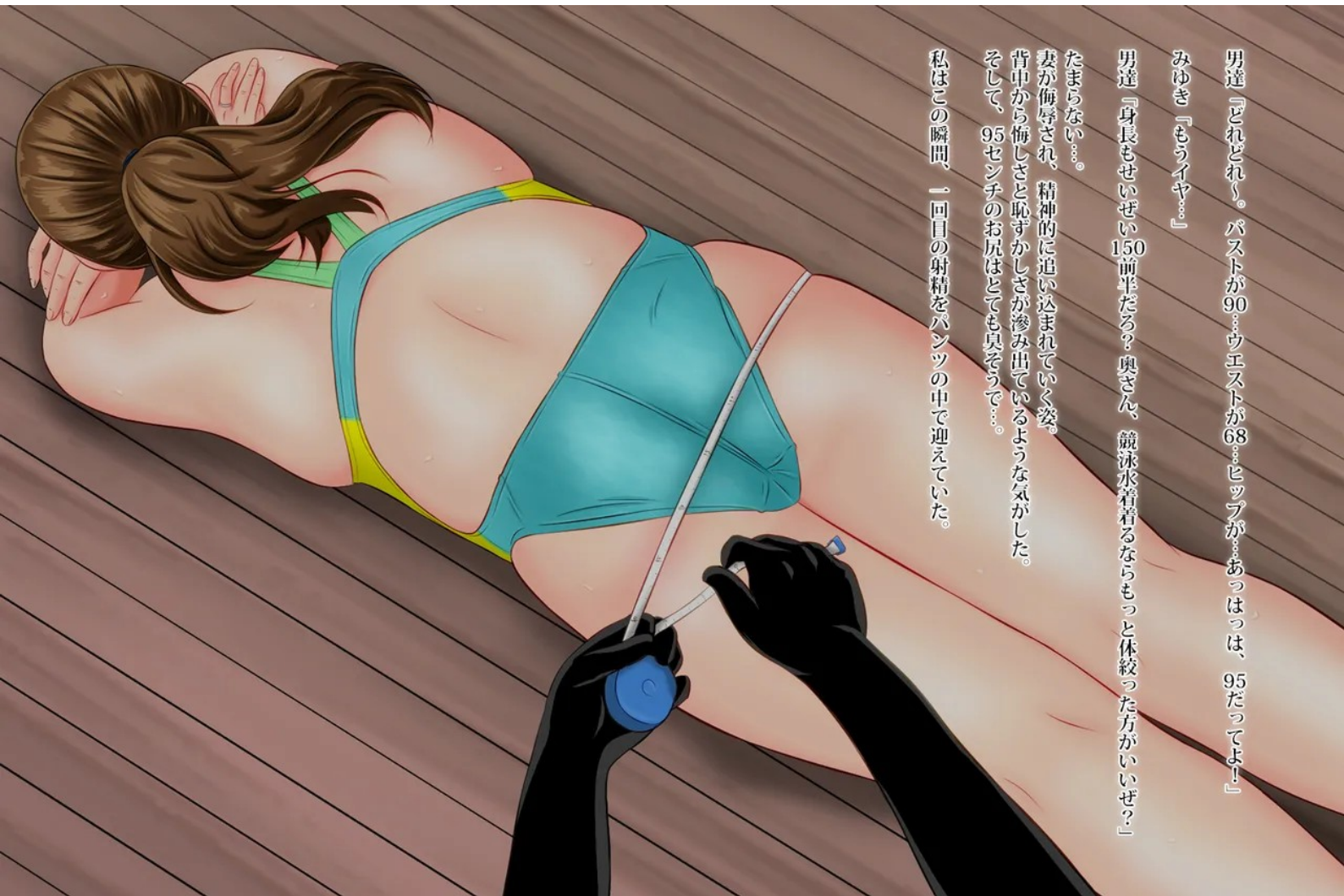
みゆき「うっ……うっ……」



男達「どれどれ。バストが90…ウエストが68…ヒップが…あっはっは、95だってよ！」
みゆき「もうイヤ…」

男達「身長もせいぜい150前半だろ？奥さん、競泳水着着るならもっと体絞った方がいいぜ？」
たまらない…。
妻が侮辱され、精神的に追い込まれていく姿。
背中から悔しさと恥ずかしさが滲み出ているような気がした。
そして、95センチのお尻はとても臭そうで…。

私はこの瞬間、一回目の射精をパンツの中で迎えていた。



男達「奥さん、測定の結果、ケツがデカ過ぎるから罰ゲームだな。」

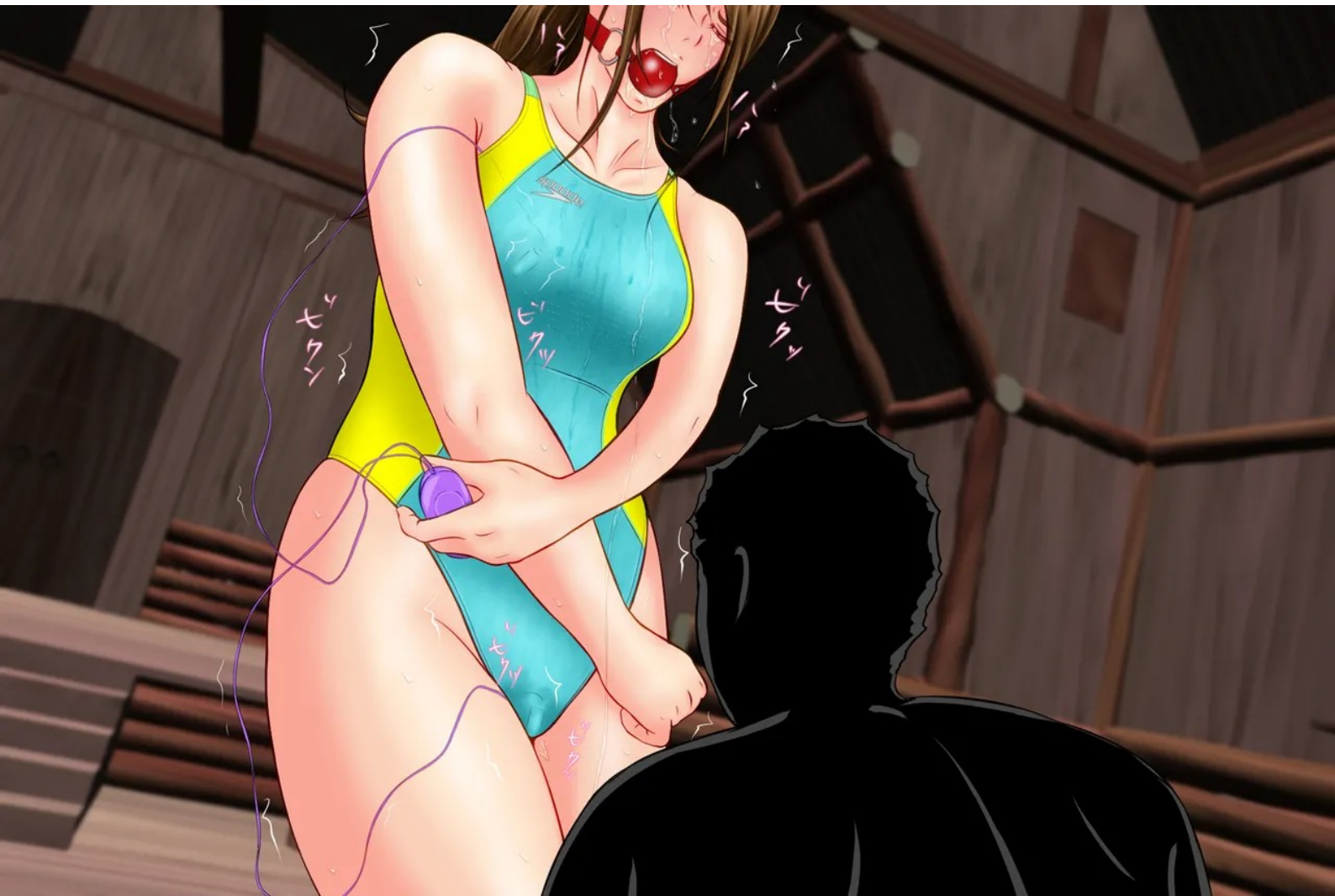
みゆき「うっ……罰ゲームって、一体何をやるんですか……」

男達「大したことじゃないよ。奥さんの大好きなローターを当てるだけさ。」

みゆき「そんな……もうイヤです……許して下さい!!」

男達「残念ながら奥さんに拒否権はないんだよ。」

彼等はまたしても妻の口にボールギャグを押し込むと、ローターを競泳水着の中に滑り込ませた。



みゆき「んぶっ……んがっ……んはあ……んんうっ……！」

妻は涙と涎でグショグショになりながら、ローターの刺激に耐えているようだった。今度はクリと乳首に当てられている。子供を産んでから妻の乳首は肥大化し、敏感になった。そんな乳首とクリの同時責めは、かなり効果的だと言える。そして、そのコントローラー部分を自分で持たされているのが何とも哀れで愛おしい。

男達「あっはっはっ！涙流して喜んでるよ、この奥さん！」

みゆき「かはっ……んっ……んぶっ……んんうっ……！」



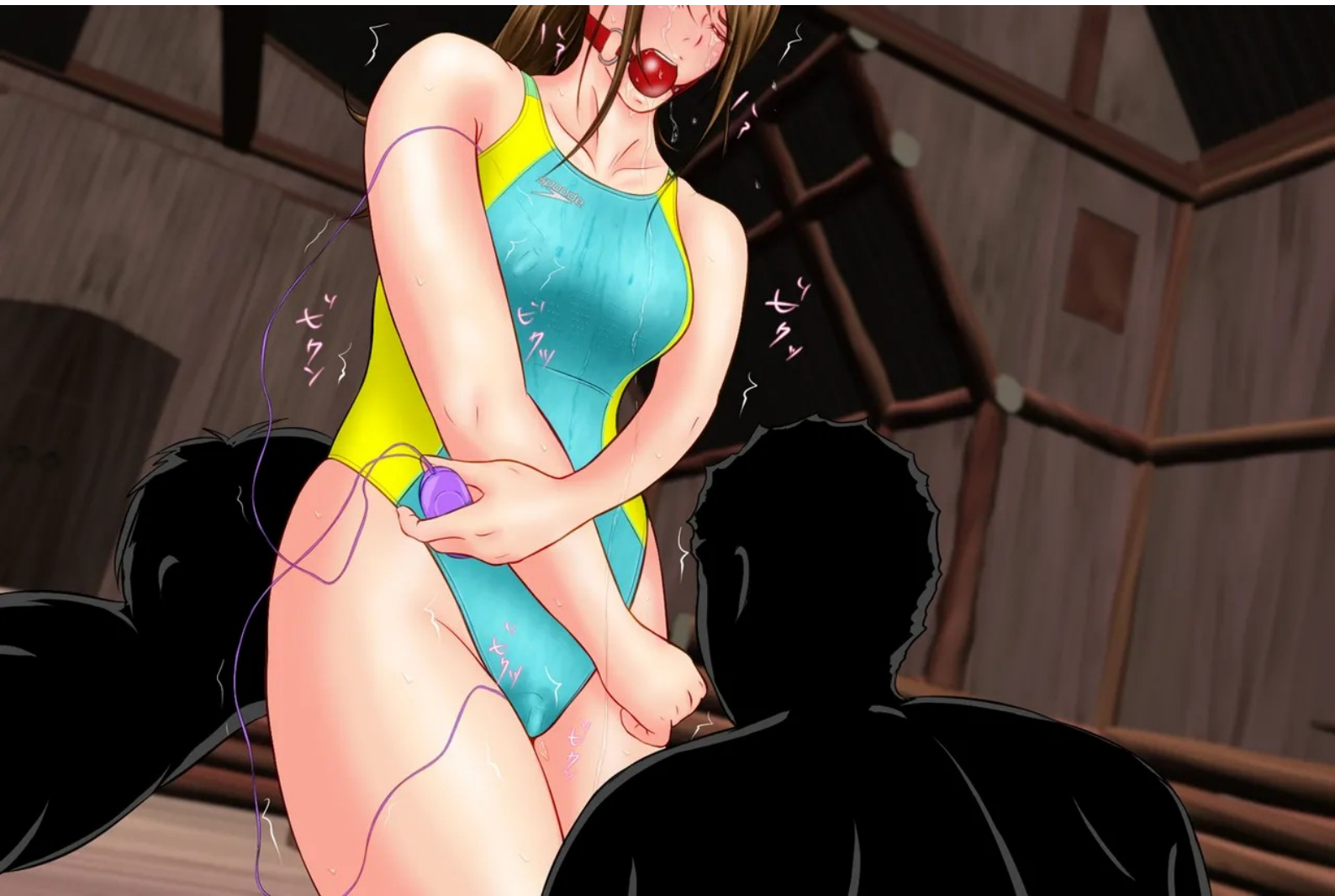
男達「おいおい、ドンドン染みが大きくなってらんぞ。メスの白らみもンンンン……！」

みゆき「んっ……んはあ……かはあ……！」

彼等を選んで正解だった。責め方が私のツボをついている。そう、痒い所に手が届くような、見ていてとても気持ちのいい責めだった。

男達「ケツも臭そうだな…どれどれ。」

みゆき「んんっ!？」



男達「くはっ、たまんねえ！競泳水着に汗が染み込んだ匂い…ムレムレだな奥さん。」

妻は汗っかきで、匂いのことは随分気にしている。

だから私をあえて家から競泳水着を着させて、妻から放出される匂いも染み込んでいるのだ。

あの匂いを、今は見守り知らずの男達に嗅ぎ回らされている。

妻にとって、これがどれほどの恥辱か…私にはよくわかるのだ。

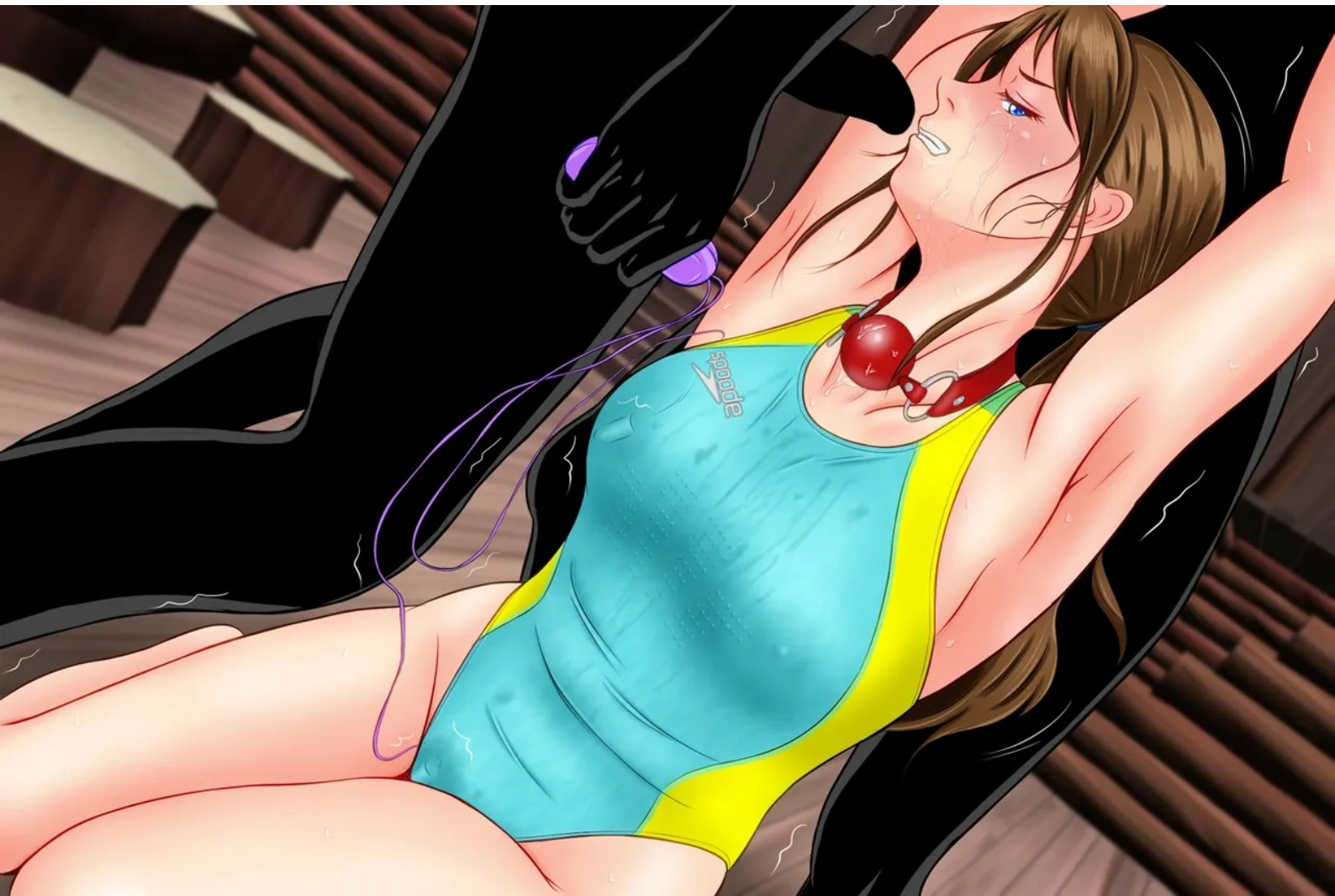
みゆき「んんっ…んちっ…グスッ…ンッ…んちっ…グスッ…」

男達「んんっっした奥さんっっおいおい、まだかまたイッたのかっ。」



すると彼等が遂に動き出した。

男達「ああ、もうガマンできねえわ。自分ばっか気持ちよくなってんじゃねーよ、エロ妻が！」
私は固唾を飲んでその状況を見守っていた。





男達「ほら、しゃぶれよ。毎晩旦那のチンポもしゃぶってんだもの。」

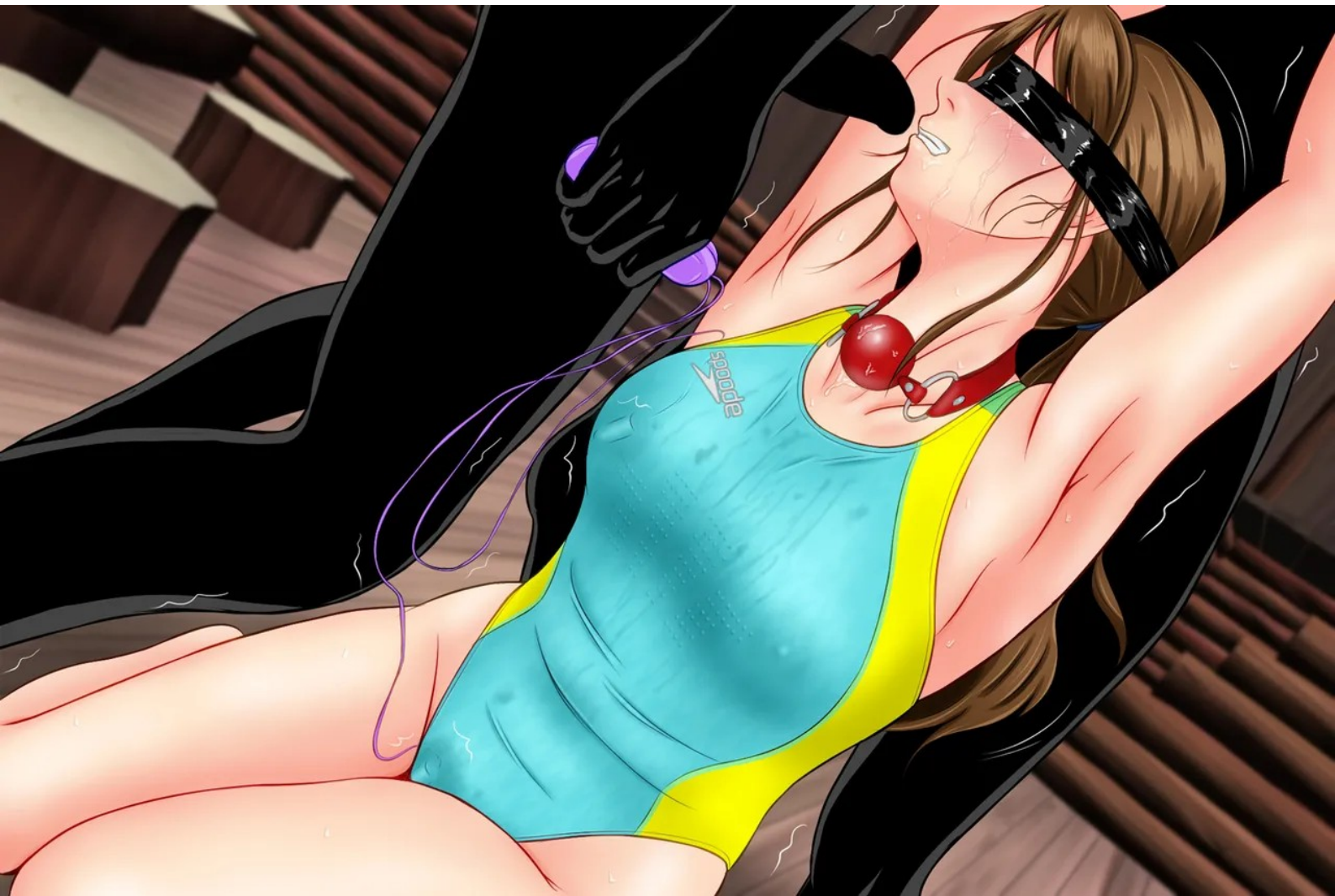
みゆぎ「……………」

妻は目を逸らし、顔なを口を喋る。
鼻先につきそうな程の至近距離に、他人の肉棒が突き立てられている。
あの優しい唇で、他人の肉棒をしゃぶるのだからか。

……………みゆぎ早く喰えなよ。

男達「恥ずかしくて旦那以外のチンポは見れないってか？ だっただらどうしてやるよ。」

彼等は先程のボンテージテープで妻の視界を再び奪った。
そして、私の方に合図を送る。
彼等の肉棒をフェラする妻の姿を、間近で見せてくれるらしい。
頼もしい連中だ。



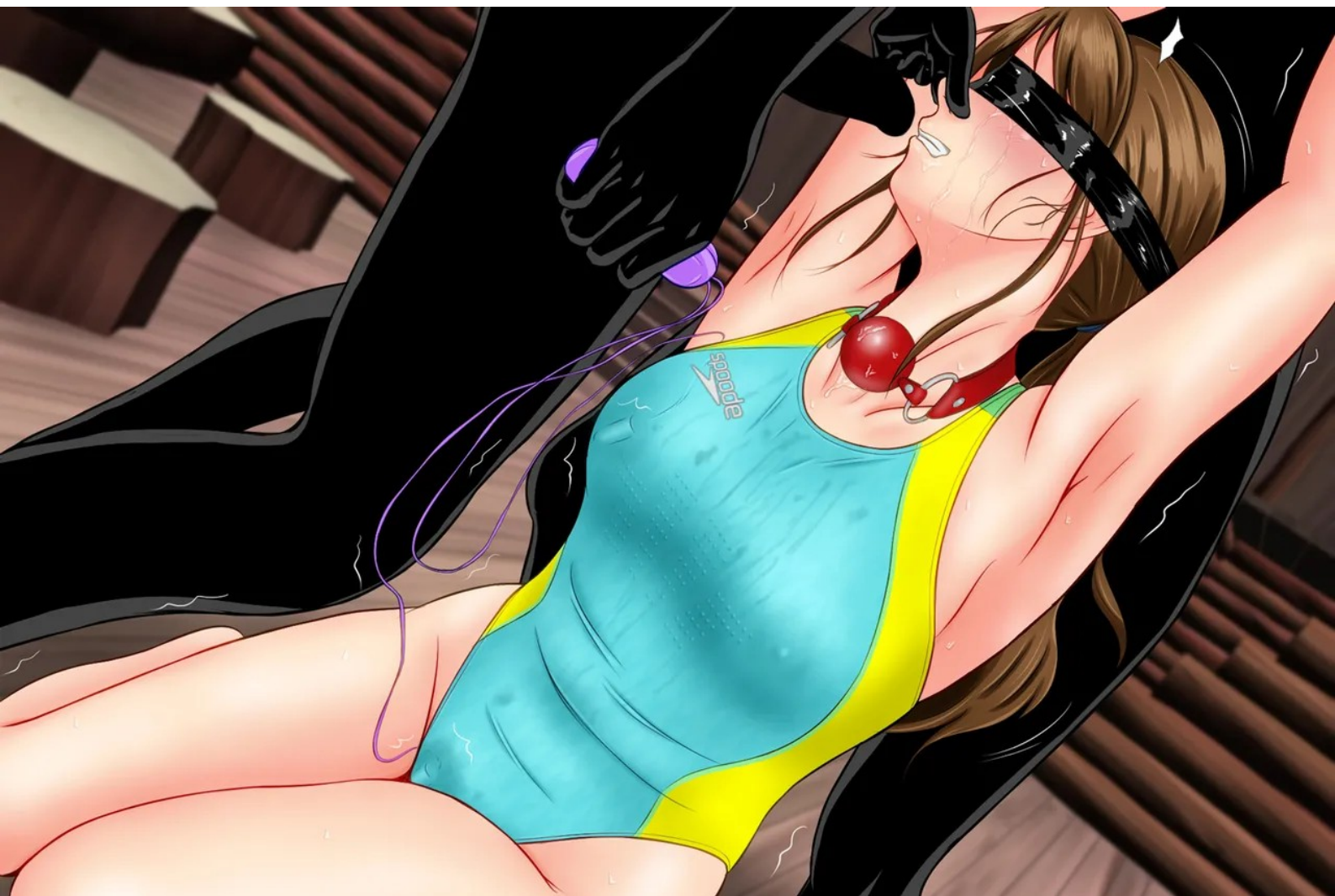


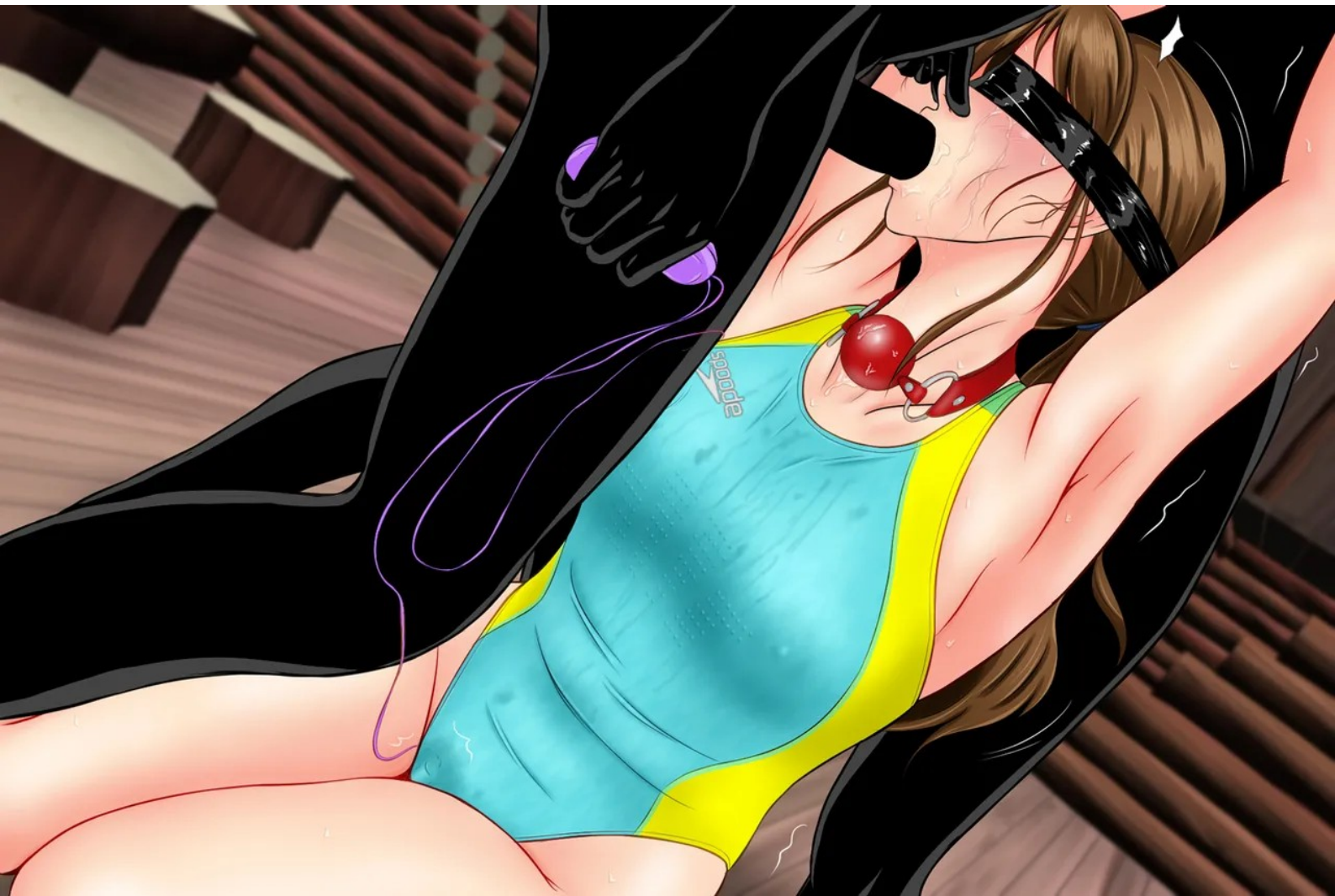
男達「これなら恥ずかしな奴だよね。おいらが興奮する。」

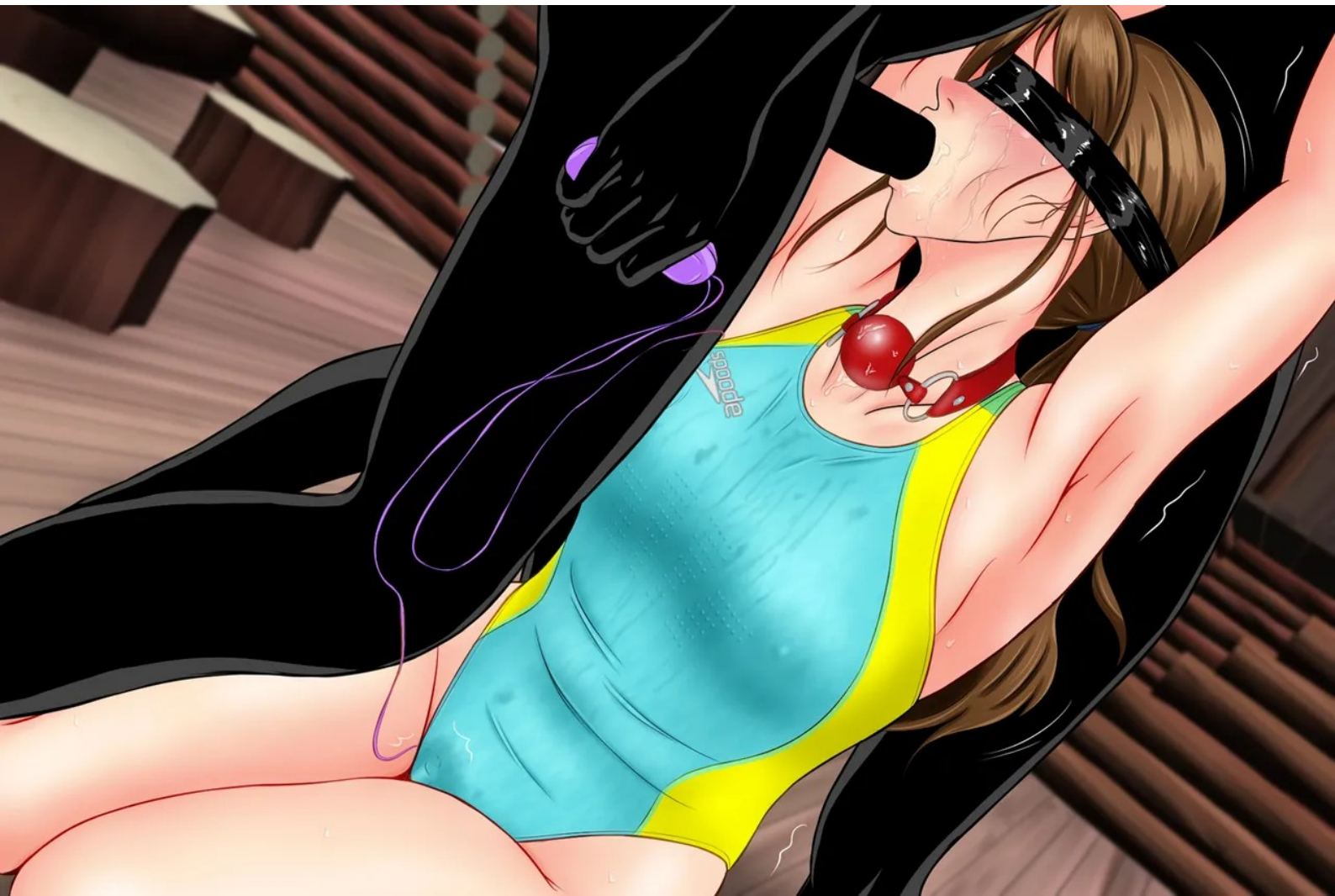
みゆき「イヤです...旦那以外のモノなんて、口にしたくありません...」

.....
みゆき

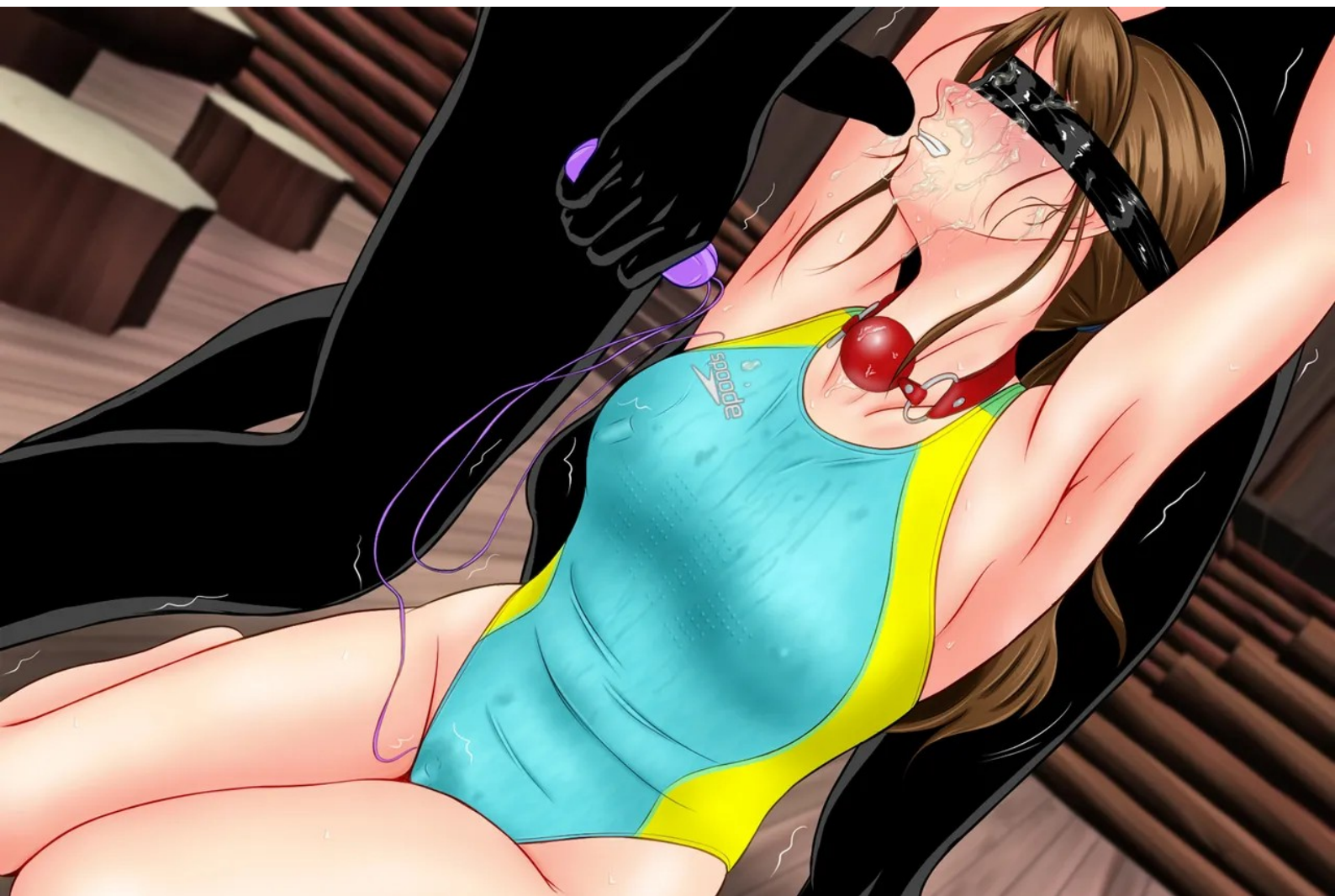
男達「はっはっはっ、可愛い奥さんだな。でも、そんなの通用しないんだよ。」







男達「ああ…奥さんのフェラ最高だよ。イキそうだし…その可愛い顔にぶっかけてやるよ。」



みゆき「も、もうやめて下さい…お願い、それだけは……い、いやあああああ……!!」



男達「ああ、イク……ッ……!!」





みゆき「……ンッ……ハア……ハア……んはぁ……グスン……ンッ……んぐら……」

男達「さすがデカケツだな。全部こぼさずに受け止めてるよ。」

みゆき「……ぐら……帰して下さる……」

男達「旦那がそのうち迎えに来るだろ。それまでは下手にここから動かない方がいいぜ？」

みゆき…もう少しだけ………楽しませてくれ。
私は心でそう呟き、もう一度身を隠した。

みゆき「ちよ、ちよつと…もうやめて下さい……イヤ、やめて……っ……」

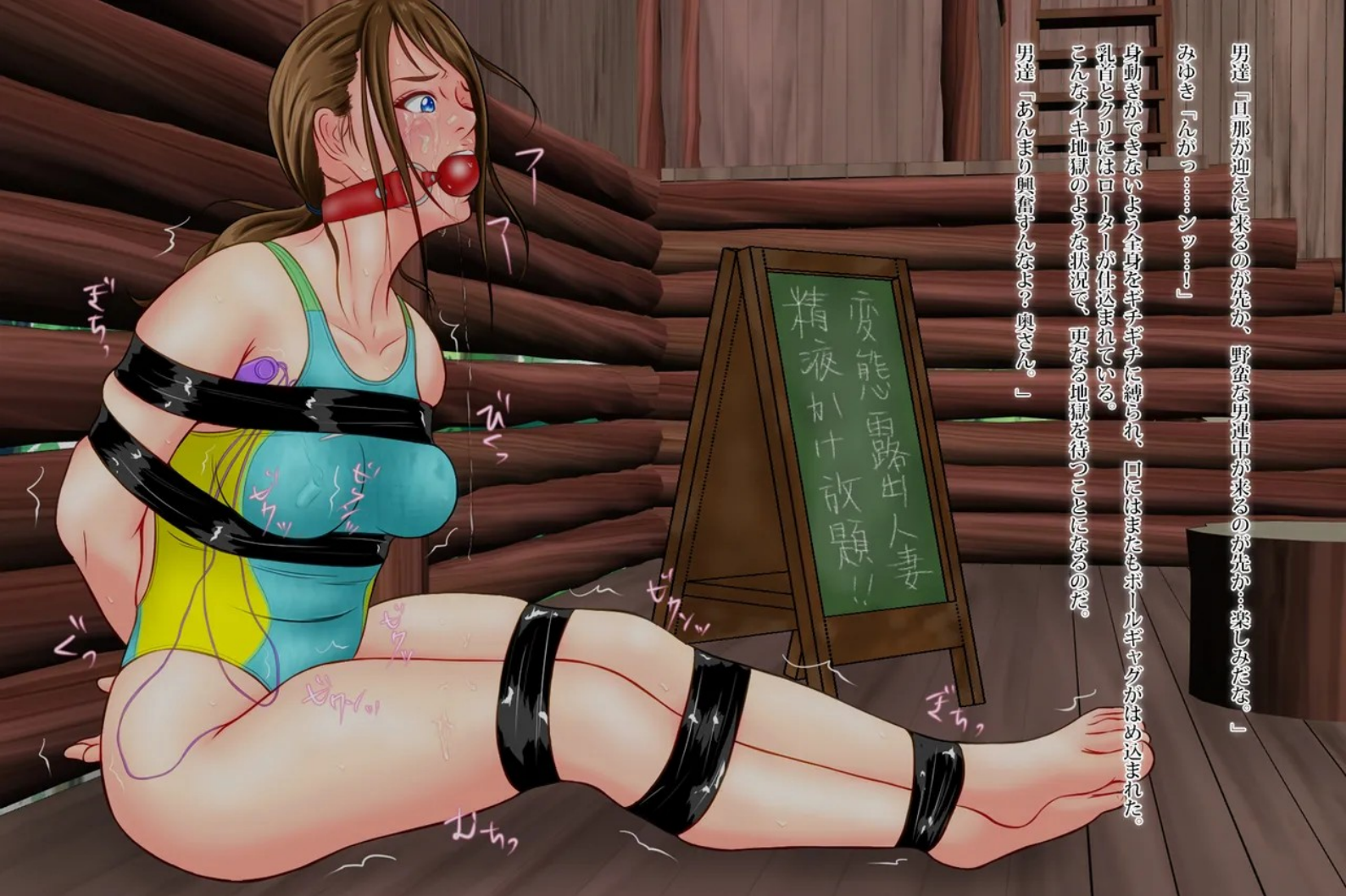


男達「旦那が迎えに来るのが先か、野蛮な男連中が来るのが先か…楽しみだな。」

みゆき「んがっ……んっ……」

身動きができないよう全身をギチギチに縛られ、口にはまたもボールギャグがはめ込まれた。乳首とクリにはローターが仕込まれている。こんなイキ地獄のような状況で、更なる地獄を待つことになるのだ。

男達「あんまり興奮すんなよ？奥さん。」



そう言って、
彼等は妻の視界までも奪っていった。



すると、ゲラゲラ笑いながら近付いて来る男達の声が聞こえてきた。
どうやら最初の客が来たようだ。

...

.....

.....

男達 「うわっ、マジかよ！すげーなこれ！」

男達 「なんかこの人妻、汗臭いな。」

男達 「気にすんなよ、どうせサーメンまみれになってもっと臭くなるんだから。」

男達 「だな、あはははは！」



その後も数人の男が妻の姿をオカズにし、精液をかけていった。
私も我慢ができず、他人のフリをして三度目の射精を妻にかけた。





愛してるよ、みゆき。

変態露出人妻
精液かけ放題!!



競水人妻寝取られハンティング

完

企画・制作

二次元スタジオ BLACK★BASE

亦及能心雨路出人妻
精液かけ放題!